

Nara Women's University

平城京のさいご

-西大寺食堂院調査成果を出発点として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学21世紀COEプログラム 公開日: 2011-04-21 キーワード (Ja): 古代, 西大寺, 都城, 平城京, 木簡 キーワード (En): 作成者: 馬場,基 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2734

平城京のさいご

—西大寺食堂院調査成果を出発点として—

馬場 基

0. はじめに

近年、平城遷都直後の平城京＝「最初」の様子については、多くの調査成果があがり、それに基づいての議論も活発である〔注1〕。一方、平城京＝「さいご」については、このところはあまり活発とはいえない様に思う。

他の都城でも、廃絶状況はあまりよくわかっておらず、議論も少ない。だが、平城廃都は、長岡京・平安京の問題とも大きな関連性を有し、古代史の上でも重要な転換点に位置する〔注2〕。議論を積み重ね、深めていく必要があると考える。

先頃、西大寺食堂院の調査成果が公表された〔注3〕。「延暦十一年」の紀年木簡が出土するなど、平城京のさいごの具体像を伝える重要な材料である。本稿では、この西大寺食堂院の発掘調査を出発点として、あらためて史料やこれまでの研究に検討を加えつつ、平城京の終焉について考えたいと思う。

1. 西大寺食堂院の発掘調査成果

1-1. 西大寺と食堂院

西大寺は、孝謙上皇（称徳天皇）の勅願寺院である。藤原仲麻呂の乱に際し、その平定を祈願したことが濫觴という。西大寺の略史は表1に示した。セットとなる尼寺は西隆寺である。父・聖武天皇が平城の東に造営した東大寺に対し、娘・称徳が平城の西に開いた、西の大寺であった。『西大寺資財流記帳』は、壮麗な建物群や、多数の仏像、平城京右京一条三・四坊に三十一町に及ぶ寺地を伝える〔注4〕。称徳女帝の強い思いが伝わってくるようである。言うまでもなく、道鏡も強く関与したであろう。平城京で造営された最後の大寺院である。

ただし、造営にはいろいろと障害も多かったらしく、『続日本紀』は、東塔心礎に用いるための石が祟って、大事件となった様子が記録されている〔注5〕。

称徳―道鏡で計画され、造営に着手された西大寺ではあるが、光仁朝に至っても造西大寺司は活動を続けており、造営は継続した。『日本霊異記』には、東西の塔は当初八角七重で計画されていたものが、四角五重に縮小されたという説話が伝わる〔注6〕。発掘調査でも、八角で建設が開始され、四角に計画変更されたことが確認された〔注7〕。この計画変更は光仁朝のことである。こうした計画縮小・変更は、各所で行われたであろう。だが、全体としては『資財帳』に記された壮麗な空間が整備されていった。

西大寺は、称徳天皇が特に強い思いを持って造営を進めた寺院である。桓武天皇の視点

表1 西大寺関係略年表（渡辺晃宏氏作成）

764(天平宝字8)	孝謙太上天皇、七尺の金銅四天王像の造立を発願する(9月)。【資】
765(天平神護1)	金銅四天王像の鑄造と、西大寺の造営を開始する。【資】
766(天平神護2)	称徳天皇、西大寺に行幸する(12月)。【統紀】 この頃までに四王院完成か。
767(神護景雲1)	佐伯今毛人を造西大寺長官に、大伴伯麻呂を同次官に任じる(2月)。 称徳天皇西大寺法院に行幸する(3月)。 称徳天皇、西大寺嶋院に行幸する(9月)【統紀】
768(神護景雲2)	飛驒国造高市麻呂と橘部越麻呂を献物の功績により造西大寺大判官に任じる(2月)。【統紀】
769(神護景雲3)	称徳天皇が西大寺に行幸し、造営に関わる官人や工人に叙位を行う(4月)。 【統紀】 この頃までに薬師金堂完成か。 弥勒浄土を造る(6月)。【扶桑略記】 この年、実忠が東大寺の工人を率いて、西大寺の齋会の幡20基を立てる。 【資・東大寺要録】
神護景雲年間	思託、八角塔の様(模型)を造る。【延暦僧録】
770(宝亀1)	東塔の心礎を破却する(2月)。【統紀】 この年、塔を八角七重から四角五重に変更か。
771(宝亀2)	呉鼓60具を作る(閏3月)。【資】
772(宝亀3)	兜率天堂(弥勒浄土堂)造営の功績による叙位を行う(10月)。【統紀】
773(宝亀4)	西塔に落雷がある(4月)。【統紀】
776(宝亀7)	粟田公足を造西大寺員外次官に任じる(11月)。【統紀】
778(宝亀9)	津秋主を造西大寺次官に任じる(5月)。【統紀】
780(宝亀11)	西塔に落雷がある(7月)。【統紀】
846(承和13)	文室真老を造西大寺次官に任じる(2月)。【統紀】
927(延長5)	桑原足床を造西大寺次官に任じる(8月)。【統紀】
928(延長6)	西大寺資財流記帳を作成する(12月)。【資】
962(応和2)	火災により講堂(薬師金堂か)とその仏像が焼失する(12月)。【続日本後紀】
11世紀初め	塔が火災に遭う(10月)。【日本紀略】
1011(寛弘8)	塔が落雷により焼失する(7月)。【扶桑略記】
1048(永承3)	大風雨により食堂が倒壊する(8月)。(東大寺南大門・興福寺講堂・新薬師寺七 仏薬師堂なども同時に倒壊)【日本紀略】
1106(嘉承1)	この頃、四天王像は露仏の状態にあり、輔静が四王堂を再建したと伝えられる。 【興正菩薩御教誡聴聞集】
1138(保延4)	西大寺塔実検文が作られ、この頃まで塔が傷みながらも現存していたことがわかる (3月)。【小右記】
1140(保延6)	この頃、鐘楼倒壊により、鐘が放置された状態にあったことが知られる。 【造興福寺記】
1153(仁平3)	この頃、食堂に弥勒金堂の仏像(本来は76体にのぼる)が安置されており、食堂 が弥勒金堂として機能していたことがわかる。【七大寺日記】
1235(文暦2)	四王堂(あるいは食堂)に修造の功績により別当済円を権律師に任じる。 【三会定一記・僧綱補任・西大寺別当次第】
1307(徳治2)	この頃、食堂(弥勒金堂として機能)と四王堂と塔1基だけで残り、他は礎石だけ であったという。【七大寺巡礼私記】
	塔修造の功績により覚珍を権律師に任じる。【興福寺別当次第】
	叡尊が西大寺に入る。以後、1290年(正応3)に没するまで西大寺伽藍中枢部の 復興に努める。【金剛仏子叡尊感身学正記】
	弥勒金堂(食堂)が燈爐の火による火災で焼失する。【一代要記】

出典略号 資:西大寺資財流記帳、統紀:続日本紀

に立つならば、天皇家の連続性を意識するのであれば「勅願の大寺」であり、新王朝意識を前面にだすならば「否定すべき先王朝の負の遺産」である、という二つの側面を併せ持っていたといえよう。

西大寺は、他の南都の大寺より衰亡がはやい（表 1 参照）。歴史の浅さや、経済基盤確立以前に後ろ盾がなくなってしまったこと、さらには上述のような微妙な位置づけが影響しているのであろうか。

現在の西大寺は往事のごく一部分であり、古代の壮観はなかなか想像しにくい。だが、近年行われた薬師金堂の発掘調査では、巨大な凝灰岩を据えた壺堀地業や、入念な版築による基壇築成などその一端を垣間見させる成果が上がっている〔注 8〕。

次に食堂院の役割を確認しておきたい。食堂院は、いうまでもなく「食堂」を中心とした区画である〔注 9〕。食堂は僧侶が会集して食事を摂る場であり、食事に伴う儀礼・儀式を行う場であった。食事は、僧侶にとっては命を受け渡してもらう行為であり、食堂での作法は重要な修行である。食堂には、「儀礼空間」としての側面があったと考えられよう。

食堂院には、食堂の他に、食事を調整する為の施設や、食料貯蔵施設等、いわば「実務空間」が存在した。官衙の厨の例なども参考にすれば、食料を調達し、管理するための機構も付属していたと考えるべきであろう。この実務空間・部門によって、食堂の食物が用意された。それらが前提となって、食堂の儀礼が行われ、寺院の宗教活動の主体である僧侶の生命も保たれた。

さらに注意すべき事は、仏前に捧げられる仏餉もまた、この実務空間によって調整されていたことである。食堂院は、僧（人）の食のみならず、仏の食も支えていたわけであり、古代寺院にとっては生命維持装置である、といっても過言ではないであろう。仏前に供えられる甘露もまた、食堂院で確保されていたと考えられる。

このように重要な位置を占める食堂院であるが、その全貌が発掘調査によって明らかになっている例は、ほとんどない〔注 10〕。東大寺食堂院の絵図は残るが、広範囲での発掘調査は行われていない〔注 11〕。西隆寺の食堂院は、ほぼ全貌が明らかにされている。ただし、西隆寺の場合、寺内での場所が西大寺食堂院推定地（後述）と対応することなどを根拠としており、必ずしも食堂院であることが確実ではない面も残っている〔注 12〕。

西大寺食堂院については、大きく三種類の資料が伝わっている。一つは『資財帳』である。『資財帳』には、食堂院について

食堂院

瓦葺食堂一字〈長十一丈、広六丈〉

檜皮殿〈長十丈、広四丈〉

檜皮双軒廊三字〈各長三丈、中広一丈六尺、東西二字、各広一丈四尺〉

- 瓦葺大炊殿〈長九丈、広五丈〉
- 東檜皮厨〈長十一丈、広四丈〉
- 瓦葺倉代〈長五丈、広二丈〉
- 西檜皮厨〈長十一丈、広四丈〉
- 瓦葺倉代〈長五丈、広四丈〉
- 瓦葺甲双倉〈各長二丈三尺五寸、広一丈八尺四寸〉 中間〈長二丈二尺八寸〉

と記す。建物の数・規模、それに一定程度構造を知ることができる。残念ながら建物配置を知ることはできないが、記載順などから、ある程度推定することができる。次に、『西大寺伽藍敷地図』等、西大寺伽藍の範囲を示した一連の絵図群である〔注 13〕。これらの絵図は、鎌倉時代に作成されたものであるが、一定程度以上の信憑性を持ち、特に食堂院の場所についてはいずれの図も一致する。また、「今弥勒」という表記がある。第三の資料である古記録などから、食堂に平安時代後期以降弥勒金堂にあった弥勒菩薩が移されていたことが知られ、これとよく対応している。したがって、西大寺食堂院は、平城京でいうと右京一条三坊八坪、西大寺の中心伽藍の北東隅にあったと考えられる。こうした資料を元にして、すでにいくつかの伽藍復元案が出されている（図 1）。

次に、西大寺食堂院の発掘調査を、本稿に必要な点を中心に検討していきたい。

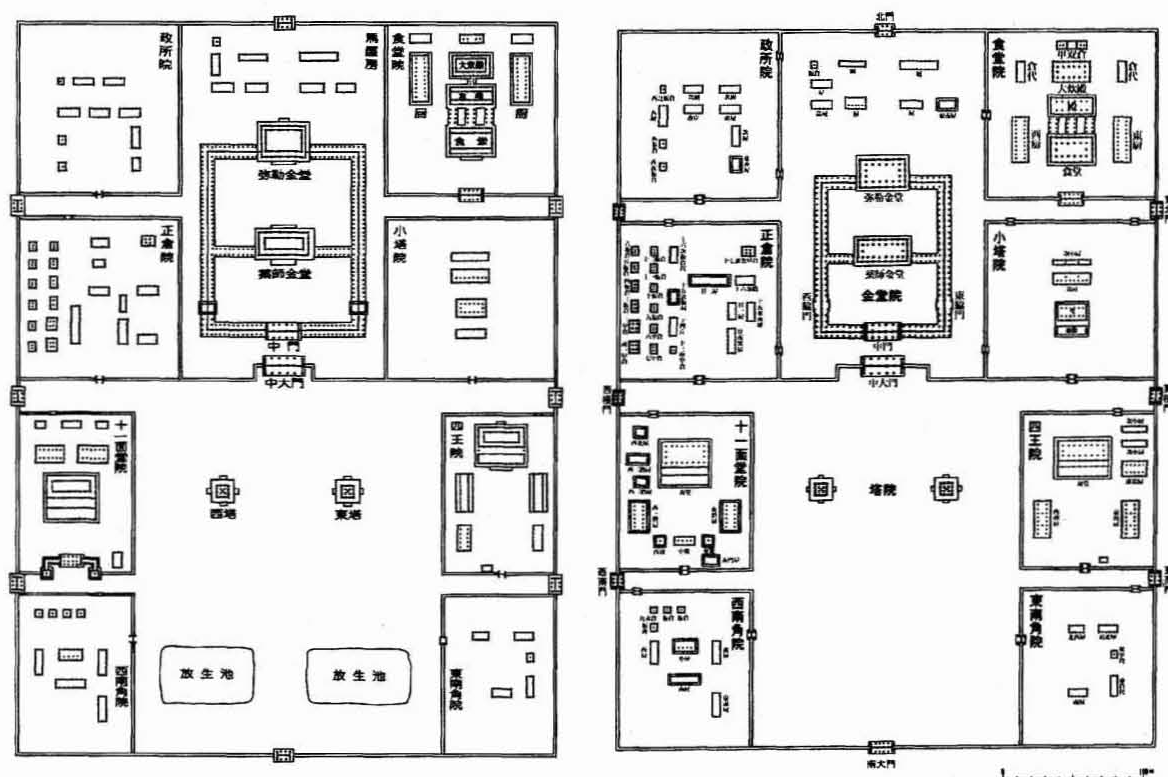


図 1 既往の西大寺伽藍復元図

1-2. 西大寺食堂院の発掘調査成果

今回、検討の中心となるのは、奈良文化財研究所が平城第 404・410・415 次として行った発掘調査である（図 2）。マンション開発に伴う事前調査で、調査面積は約 1900 m²である〔注 14〕。

西大寺周辺は市街化が進み、発掘調査も小面積の場合が多い。食堂院周辺では、奈良市教育委員会によって数次の発掘調査が行われている。奈良市第 12 次調査では、大型建物の東北隅部分を検出し、食堂本体と推定した〔注 15〕。奈良市第 15 次調査では、埋甕列と、基壇状の遺構などを検出した〔注 16〕。

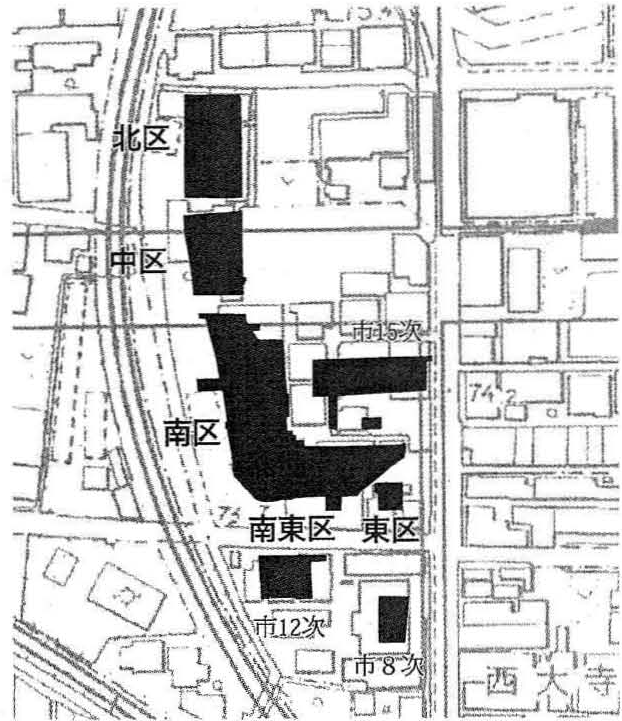


図 2 西大寺食堂院調査位置図

また、奈良市第 8 次調査では顕著な遺構を確認しておらず、その場所には食堂院関連の建物が存在しないと推定された〔注 17〕。平城第 404・410 次調査の調査位置は、奈良市第 12 次調査の北側で、奈良市第 15 次調査の西及び南側にあたる。奈良市 12 次調査で発見された建物が食堂であるならば、檜皮殿・大炊殿などの検出が期待され、また奈良市 15 次調査でみつかった埋甕列や基壇状遺構の延長も想定された。

調査の結果、西大寺造営以前、西大寺期、西大寺解体後の大きく三時期の遺構が検出された（図 3）。西大寺期の遺構は、東西棟の大型礎石建建物（檜皮殿・瓦葺大炊殿）・総柱の東西棟掘立柱建物（推定甲双倉）〔注 18〕・掘立柱門（北門・資財帳になし）・井戸・南北棟掘立柱建物（井戸屋形）・埋甕列・凝灰岩列（東檜皮厨か）などである。これらは、『資財帳』の記載と良く一致し、周辺の調査とあわせて食堂院の全貌がほぼ明らかになった（図 4）。瓦の年代観から、西大寺食堂院の整備は、金堂よりやや遅れ、東西塔と同時期の宝亀年間と考えられる。そして『資財帳』に記載されることから、遅くとも宝亀十一年には、大寺院にふさわしい規模で整備されていたのである。

注目したいのは、これらの施設の廃絶状況である。廃絶の時期が想定されるのは、大炊殿・推定甲双倉・北門・井戸・埋甕列であり、また瓦を大量に捨て混んだ廃棄土坑が参考になる。それぞれ確認していきたい。なお、瓦は奈良時代のものだけであり、葺き直したり、修理した痕跡が見当たらない。また、遺構の面からも、改修・修理・立て替えは確認できていない。西大寺食堂院北半の遺構は、基本的に一時期のみと考えられる。

瓦葺大炊殿

大炊殿は、礎石に壺掘地業を施す。壺掘地業埋土中には瓦を敷き込む場合がある。この瓦はいずれも奈良時代のもの。礎石の抜き取り穴からは、9世紀前半以前の土器片が出土した。9世紀前半以前に廃絶したと考えられる。

埋甕列

甕そのものは奈良時代。ただし、割れた甕の内側から10世紀以降の土器が出土した。

推定甲双倉

掘形・抜き取り穴とも出土遺物は奈良時代のものである。また、重複関係から後述の廃棄土坑より古い。後述する廃棄土坑との重複関係からも、奈良時代末以降比較的早い時期に廃絶したと考えられる。

北門

掘形からは奈良時代の土器が出土。抜き取り穴からは9世紀半ば～10世紀前半の土器が出土。そのころに解体されたのであろう。

井戸

井籠組の井戸枠を持つ(図5)。井戸枠内法で一辺約2.3mと巨大。井戸枠の材は、年輪年代測定によると767年秋～768年春にかけて伐採されたもの(〔注23〕最新のもの。樹皮が残る)。最終的にゴミ捨て穴として利用される。井戸内遺物は奈良時代。出土木簡の年紀は延暦十一年六月が最新で、延暦十～十一年に集中。埋土の状況から、徐々に埋もれて廃絶したのではなく、一度に埋められて廃絶したと考えられる(図5断面図)。珪藻類が検出され、投棄開始から終了まで数週間程度を要したとみられる。以上から、延暦十一年に埋められた。なお、この井戸については後に詳述する。

廃棄土坑(410次)

総柱建物と重複する土坑。上層と下層からなる。下層は方形を呈する。おそらく、下層の土坑に瓦を投棄した後、土のしまりが悪く沈下がおきるなどの理由によって、上層の土坑が形成されたのであろう。下層出土の瓦はいずれも奈良時代。周辺の瓦葺建物は、甲双倉及び大炊殿であり、これらの建物に利用された瓦が投棄されたと考えられる。上層からは9世紀以降の土器が出土した。

廃絶の画期は大きく二時期あり、奈良時代末～9世紀初頭以前と10世紀前半である。第一の画期では、大炊殿・甲双倉・井戸などの実務空間が一斉に廃絶する。実務空間廃絶後は、区画施設などだけが残る。おそらく、区画の中に食堂のみが建っていたのであろう(〔注24〕食堂は、弥勒金堂として用いられ、維持されていた)。そしてこれらも、10世紀前半には廃絶してしまう。

この廃絶の画期は、どのように位置づけられるものであろうか。節を改めて確認することにしたい。

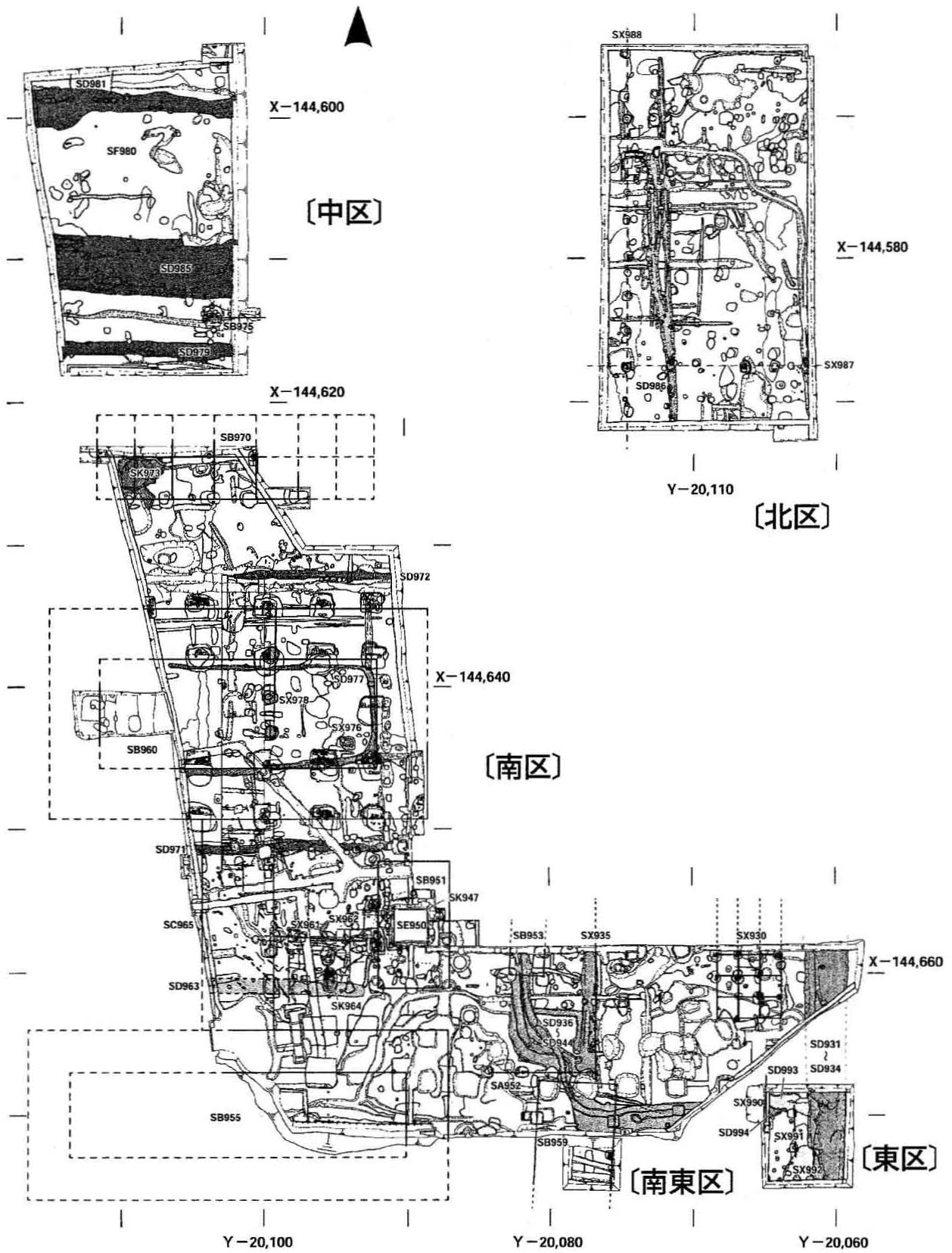
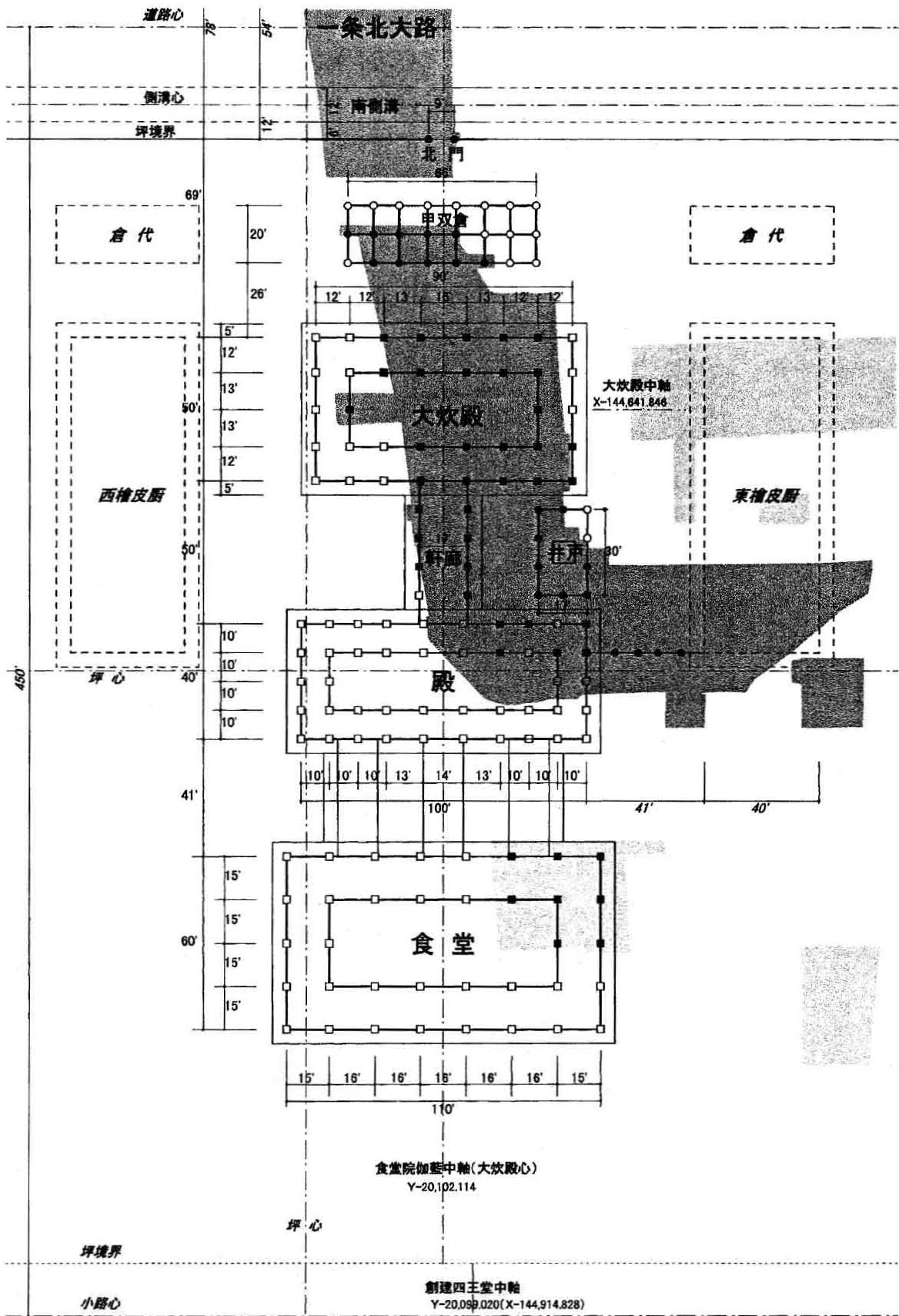
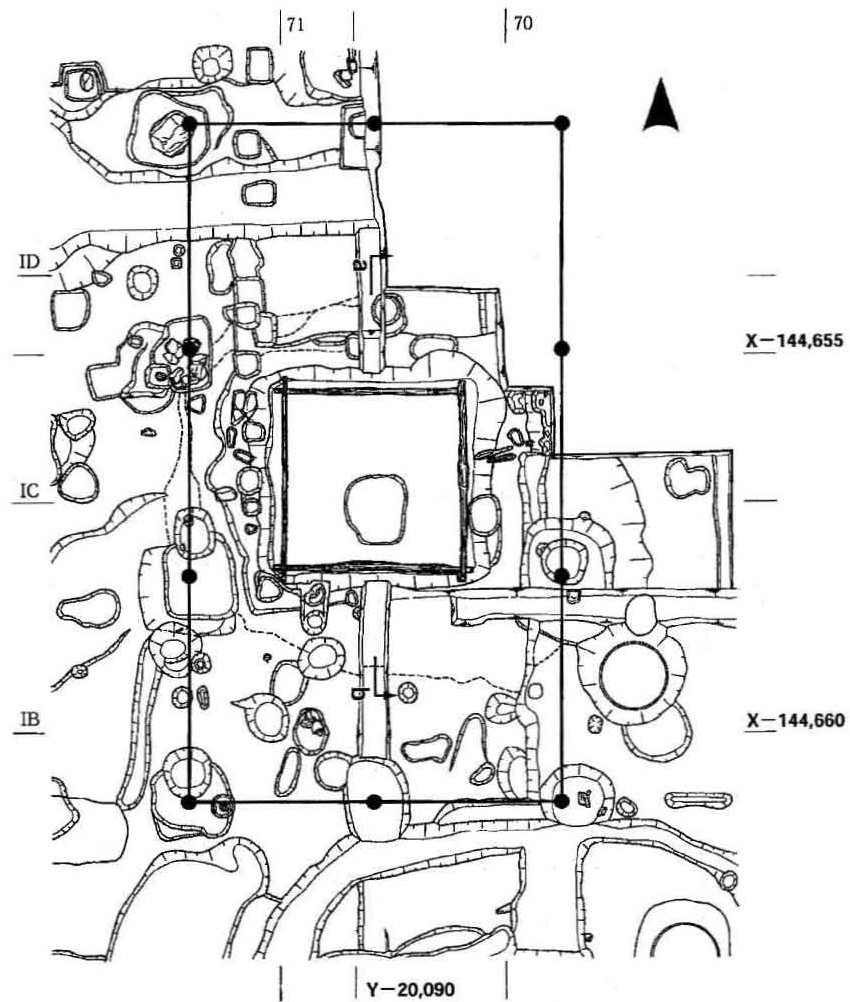


图3 西大寺食堂院遺構図 1:400

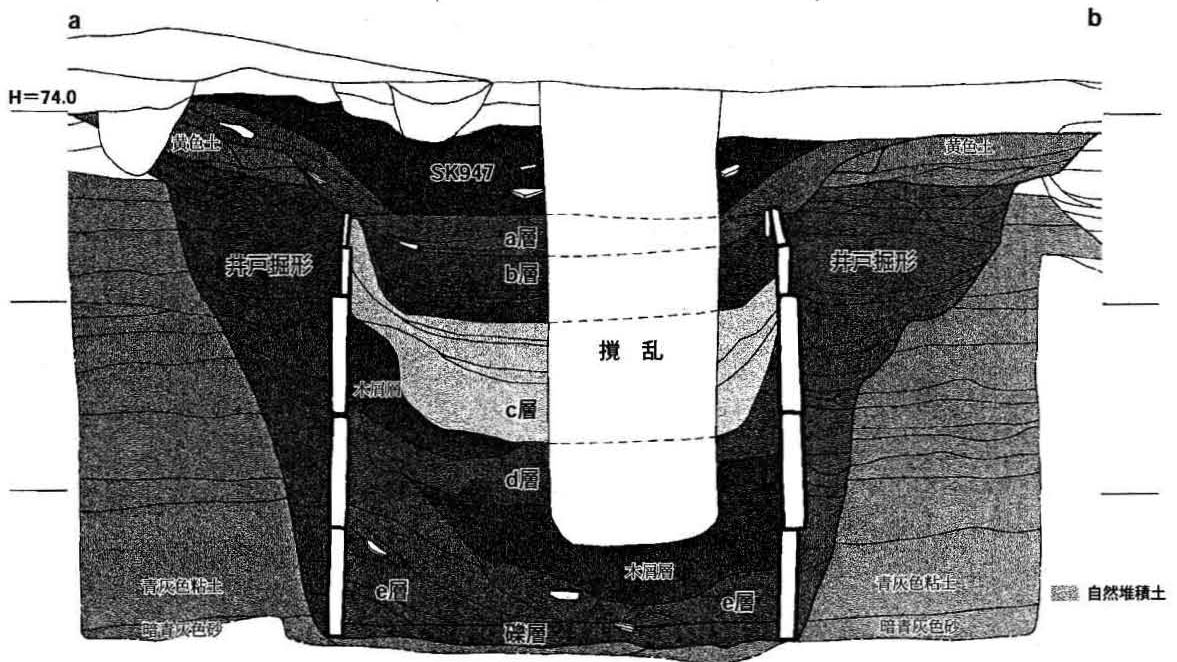


単位：1' = 1尺 □：礎石建ち ○：掘立柱 黒塗は検出済 文字の斜体は推定を示す

図4 西大寺食堂院建物配置復元案 1:600



SE950 · SB951 遺構平面図 1:100



SE950 断面図 1:40

图5 西大寺食堂院井戸

1-3. 西大寺食堂院の変遷のかたるもの

食堂院区画施設が廃絶した 10 世紀前半は、ちょうど食堂が倒壊する等の記録が残る時期である（表 1 参照）。おそらく、これらは関連するものであろう。儀礼空間・仏堂としての食堂と区画施設は、10 世紀初頭まで一応は維持され続けていた。

一方、実務空間は 9 世紀初頭以前に廃絶してしまう。前述のように、食堂院の実務空間は、宗教的側面も含めて、古代寺院の「生命維持装置」であった。巨大な井戸は、単に調整する食事の量に対応して巨大だ、というだけではなく、宗教的意義も持つ「聖なる井戸」であったと考えられる〔注 19〕。そうした空間が消滅し、井戸も埋め立てられてしまったことは、宗教的にも、経営面でも、西大寺の活動の激しい変化と連動していると考えざるを得ない。しかも注目されるのが、こうした西大寺の劇的な変化が、ごく短期間の間のことと考えられるのである。

西大寺食堂院の井戸は、埋土の状況から、徐々に埋もれていったのではなく、一度に人為的に埋められたと考えられる。埋土の遺物は、いずれも奈良時代のものであり、平安時代に降る遺物は出土していない。

井戸出土遺物に、多量の木簡が含まれる。整理作業が完全には終わっておらず、正確な全貌はまだ明らかになってはいないが、ほぼおよその状況は判明している（釈文参照）。

内容は、食料の支給に伴う木簡、物品の収納に関わる木簡、地子米の荷札など、食堂院の活動の、非常に広い範囲に渉る。また、再利用の痕跡が多く認められ、多様で活発な活動を反映していると考えられる。木簡から見ると、西大寺・西大寺食堂院の活動は、きわめて活発である。

木簡の、公表されている最新の年紀は、延暦十一年六月十五日で、地子米の荷札にかかっている。文書木簡は、年を記していないが、確認できる月は七月～十一月。これらの文書木簡が延暦十二年のものであれば、地子米荷札に延暦十二年が見えないことが不審である。また、文書木簡は、通常長期保管はされない〔注 20〕ため、延暦十年のものである可能性は低い。したがって、これらの文書木簡は、延暦十一年七月～十一月のものと考えるのが妥当であろう。つまり、木簡の投棄＝井戸の廃絶は、延暦十一年十一月の直後、と考えられる。

また、出土木簡中の削屑の比率が低いと指摘されている〔注 21〕。概報では、再利用時に丁寧に削らなかった可能性を指摘する。だが、ごく薄い木簡も多く、木簡を削る作業は行われていたと考えるべきである。つまり、この比率の低さは、西大寺食堂院での再利用の際に、一般に木簡が削られなかったことを意味するのではなく、井戸にゴミが投棄された時間とその前後に削られた木簡の量が少なかったことを示すと考える。

西大寺食堂院の場合、井戸を埋める＝機能を停止する際に木簡が投棄されている。事務が停止したため、不要になった事務書類＝木簡を投棄したのであろう。したがって、形の

ある木簡の多くは、日常的な事務の中で消耗しきって投棄されていたものではなく、事務作業の停止にともなって処分されたものと考えられる。つまり、形のある木簡の点数は、ある時点での事務量そのものと比較的近いものであった。したがって、削屑の比率が低いのは、井戸への投棄の時間と、事務作業が平行していた時間が短い為と考えられるのではないだろうか。言い換えると、西大寺の活動停止がきわめて急激であった、ということであろう。

一方、出土木簡を中心とした遺物は、もう一つ興味深い事実を伝えている。これらからみると、西大寺食堂院はきわめて活発に活動している。荘園からの地子米を収納し、日常的な食料の確保を行い、日々の仏教行事に応じた齋食を整える。木簡の再利用も多く行われ、事務作業はしっかり維持されている。これらの木簡の記載や、大量に出土した製塩土器を見る限り、食堂院の活動は日常的で、かつ非常に活発である。食堂院の活動は寺院全体の活動と直結しているから、西大寺も日常的で、活発な活動を続けていたと考えるべきである。延暦三年の長岡遷都後も、西大寺は活発な寺院活動を維持していたことを、鮮やかに示している。そして、こうした日常的で、活発な寺院活動が、すでに見たように、延暦十一年十一月頃に、数週間で劇的に変化したのである。

大炊殿をはじめとする建物も、9世紀初頭にはほぼ廃絶した。井戸と完全に同時期に解体された、とする根拠は十分ではないが、ほぼ同時期に、一連の流れの中で廃絶したとあってよい。以上から、8世紀末～9世紀初頭における西大寺の変化は、徐々に衰退していった、というものではないことが明らかになったと思う。長岡京遷都後も、活発な活動を続けていたものが、延暦十一年十一月頃に急激に変化し、活動を縮小あるいは休止する。食堂院内の建物や施設は廃絶し、食堂のみが残る。この食堂は後に弥勒金堂として用いられ、維持されるが、それも10世紀に大きな打撃をうけ、廃絶していく。

10世紀ともなると、創建から百年以上を経ており、その間時間の経過と共に解体していった様相も想像にたやすい。しかし、食堂院の井戸が埋められ、実務空間が事実上機能停止した延暦十一年は、『資財帳』作成からわずか十二年しか経っていない。食堂院の整備はすでに述べたように宝亀年間と考えられるから、最大でも二十年ほどである。しかも、きわめて急激に廃絶している。当然、何らかの事情を考えるべきである。

すぐに想定されるのは、遷都の影響であろう。長岡京への遷都は延暦三年のことであり、長岡遷都と、西大寺食堂院の解体を直ちに結びつけることはできない。『概報』では、平安遷都との関係を指摘する。西大寺食堂院が解体されてすぐ後の延暦十二年正月には、平安遷都が決定している〔注 22〕。延暦十一年十一月に、すでに遷都に向けた準備が進められていても不思議ではない。

そこで、この「遷都の時代」の様相を、平城京からの視点で改めて整理する。そしてその中に西大寺食堂院を位置づけたとき、どのように考えられるか、検討したい。

2. 平城と長岡・平安

2-1. 長岡遷都と平城宮・京

長岡宮・京の造営過程は、発掘調査成果等と僅かな史料を照合することで、これまでに多くのことが明らかになっている〔注 23〕。また、長岡遷都後の平城宮・京についても、優れた研究が発表されている〔注 24〕。これらに基づきながら、若干知見を加えつつ、本稿に必要な範囲で事実関係を確認・整理しておきたい。また、長岡京を論じる際に、「桓武の意図」という観点が常にクローズアップされる傾向にある様に感じる。しかし、こうした観点は、あくまでも様々な事象を検討した上で、最終的に導入されるべきであろうと思う。最初から、「桓武の意図」ありきで論議するのは望ましくないであろう。まずは、「桓武の意図」という観点を排除し、事象の確認とその検討を行いたいと思う。

長岡宮の造営は大きく二時期に分けることができる〔注 25〕。前期の造営は中枢部分を中心とし、建物は難波宮からの移築である。『平安遺文』の一号文書として所収される、「延暦二年六月十七日太政官牒」は、長岡への建物移築のために難波周辺の交通網を再整備したことを示すと考えられる。この延暦二年ごろにはすでに、入念な造営の準備に入っていたと考えられよう。後期の造営は、内裏地区や官衙が中心で、平城宮から建物を移築していると考えられる。後期の造営は、延暦八年に内裏が移動したとみられることから、その前年の延暦七年ごろ以降と考えられている。

一方、平城宮には、少なくとも延暦十一年ごろまでは、物資や建物が残っていたと考えられる〔注 26〕。延暦四年には平城宮で斎王の行事が執り行われ、それにともなって桓武天皇も滞在した。延暦十年に平城宮諸門を長岡に移築する。これによって、平城宮はその圍繞施設を失うが、逆に言えばそれまでは圍繞施設が健在であったことを示す。また、延暦十一年には諸衛を派遣して平城旧宮を警備させているが、これは警備に足る対象（物資・建物など）がまだ残っていたからであろう。

ただし、律令官司機構は長岡宮に移転していた。平城宮内の出土木簡で最新の年紀は、延暦三年四月十二日である〔注 27〕。この木簡は、讃岐国からの米の荷札なので、時間幅を考える必要がある。また、平城宮・京では、奈良時代後半の木簡出土は少ない点も考慮すべきではある。しかし、最新の年紀という点では重視して良いであろう。宮内での事務作業など、律令官僚機構の活動は、長岡遷都とほぼ同時に停止していると考えられる。長岡京では、

- ・周防国
- ・延暦二三年 372,29,6 061 (題籤軸) 長岡京 1-135
- ・内蔵北二\蔵外出
- ・延暦二年正月 (59),31,11 061 木研 23-23 頁-1 (2)

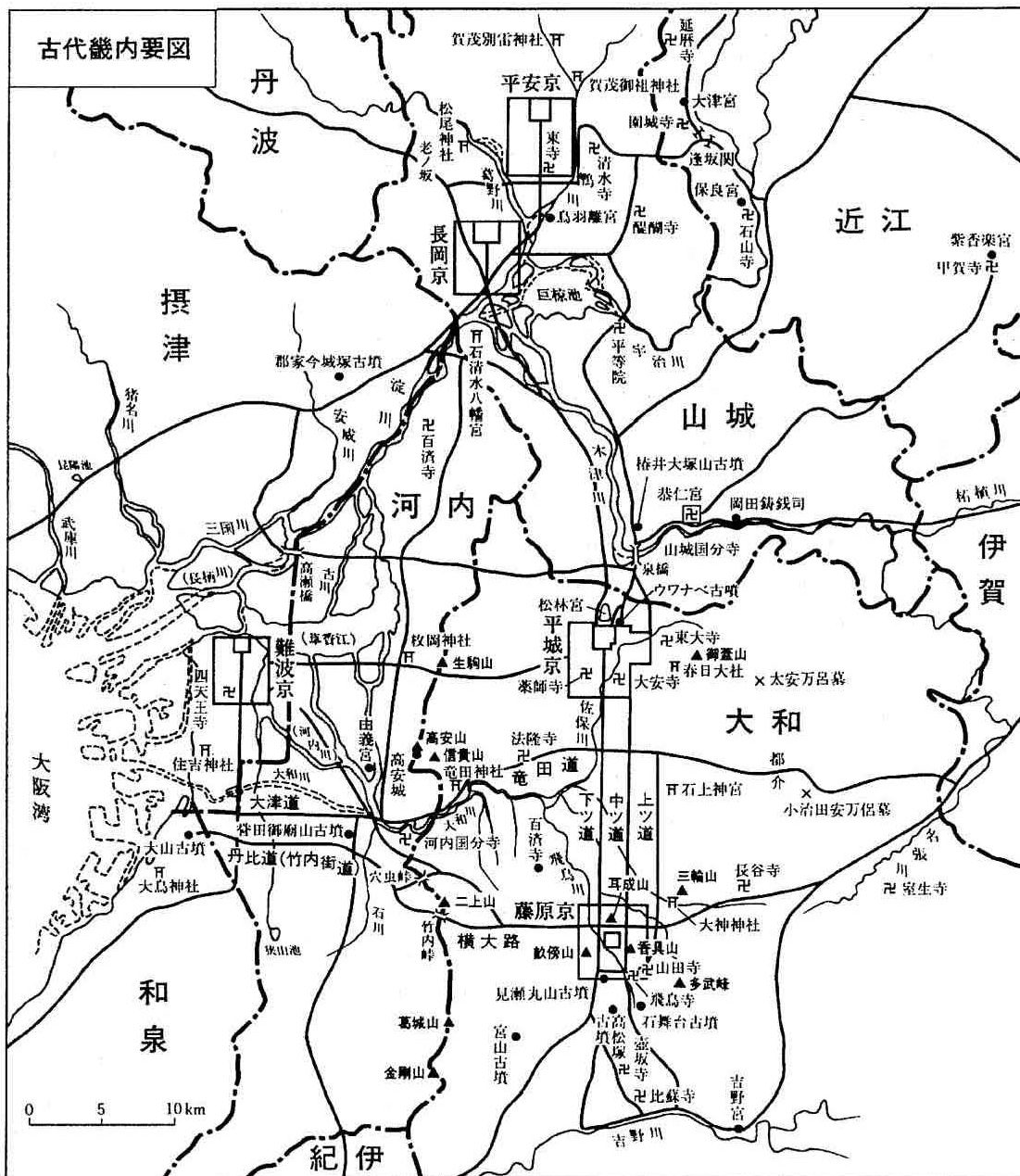


図6 都城の位置関係

という題籤軸が出土している〔注 28〕。平城時代に使われていた文書（帳簿）に、長岡時代にも張り継ぎながら利用していたのであろう。官衙（曹司）の移動と伴うと考えられ、律令政府の実務部門が長岡に移動した様子を示している。

さて、京内はどのような状況であったのであろうか。南都の諸大寺を長岡京に移転しなかったことは有名である。南都の寺々は奈良に残って活動を継続していた。一方で、延暦十年に至って、山背国内の寺院を整備した〔注 29〕。また、延暦九年には「京下七ヶ寺」

で誦経をさせている〔注 30〕。

一方、京内の様子をうかがわせる興味深い史料がある。平安遷都が決定した後の延暦十二年十二月に「長岡京百姓宅地価直、不可悔返云々」という指示が出されている〔注 31〕。平安遷都が決定・発表された後に、長岡京内の宅地価格が急落し、売買を廻ってトラブルが頻発したのであろう。平安遷都がなければ、長岡京内の宅地の商品価値が高かったことを示しており、貴族や官人たちも長岡京内に宅地を確保していたと考える証左となるのではないだろうか。わずか十年の都ではあったが、長岡京は古代都市として充実しつつあったとみることができよう。

しかし、そのように充実しつつあり、かつ平城宮の解体にも目処が立ったと考えられる延暦十二年に、平安遷都が決定される。平安遷都の発表が延暦十二年正月であるから、遷都に向けての調査や計画は、さらにその前から着手されていたはずである〔注 32〕。まるで、平城解体と平安遷都が呼応するかのようにはさ感ぜられるのである。この問題について、節を改めて若干の検討を試みようと思う。

2-2. 平城宮・京の解体と平安遷都

まず、朝堂院などの中枢施設の在り方に注目したい。平城宮と平安宮は、十二堂型式の建物配置をとる。この十二堂型式は、藤原宮ではほぼ確立し、前期平城宮を経て、後期平城宮で確立し、平安宮に受け継がれた。一方、長岡宮の朝堂は難波宮と同じ八堂型式である。これは、難波宮の建物をそのまま移築したことと対応しているが、すでに繰り返し指摘されているように、藤原—平城—平安と展開する朝堂院の型式とは異質なものである〔注 33〕。十二堂と八堂では、その場に居る人間にとって、大きく空間の印象は異なったはずである。また、実際に利用する際にも、藤原—平城と培われてきた十二堂型式の利用方法と八堂型式でのそれとは異なったものにならざるを得ない。十二堂と八堂の差を、軽視することはできない。

一方、平城宮内の中枢施設はいつまで残っていたのであろうか。平城宮内の施設を解体・移築した際、長岡宮に確実に移動しているものは内裏・官衙および宮城門である。したがって、単純に考えるとこれらの施設の長岡宮への移築が終了した時点で、平城宮内にはそれ以外の施設、すなわち大極殿や朝堂といった中枢施設と、倉庫などが残っていた、ということになる。倉庫が残っていたとすると、先述の延暦十一年に諸衛を派遣しての警備は非常に理解しやすい。中枢施設の解体に関して、大変興味深いことが指摘されている。かつて、奈良時代中に唐招提寺に施入されたと考えられていた東朝集堂が、長岡遷都～平安時代初頭に唐招提寺に施入されたと考えられるようになった〔注 34〕。出土瓦の年代からの検討であり、細かな時間の特定はできないが、平安初頭にずれ込む可能性があることは興味深い。内裏や官衙など、他の建物が移築されたのに、中枢施設だけが残っていたというのは奇異にも感じられる。しかし、天平年間の恭仁宮遷都の際に、第一次大極殿院が

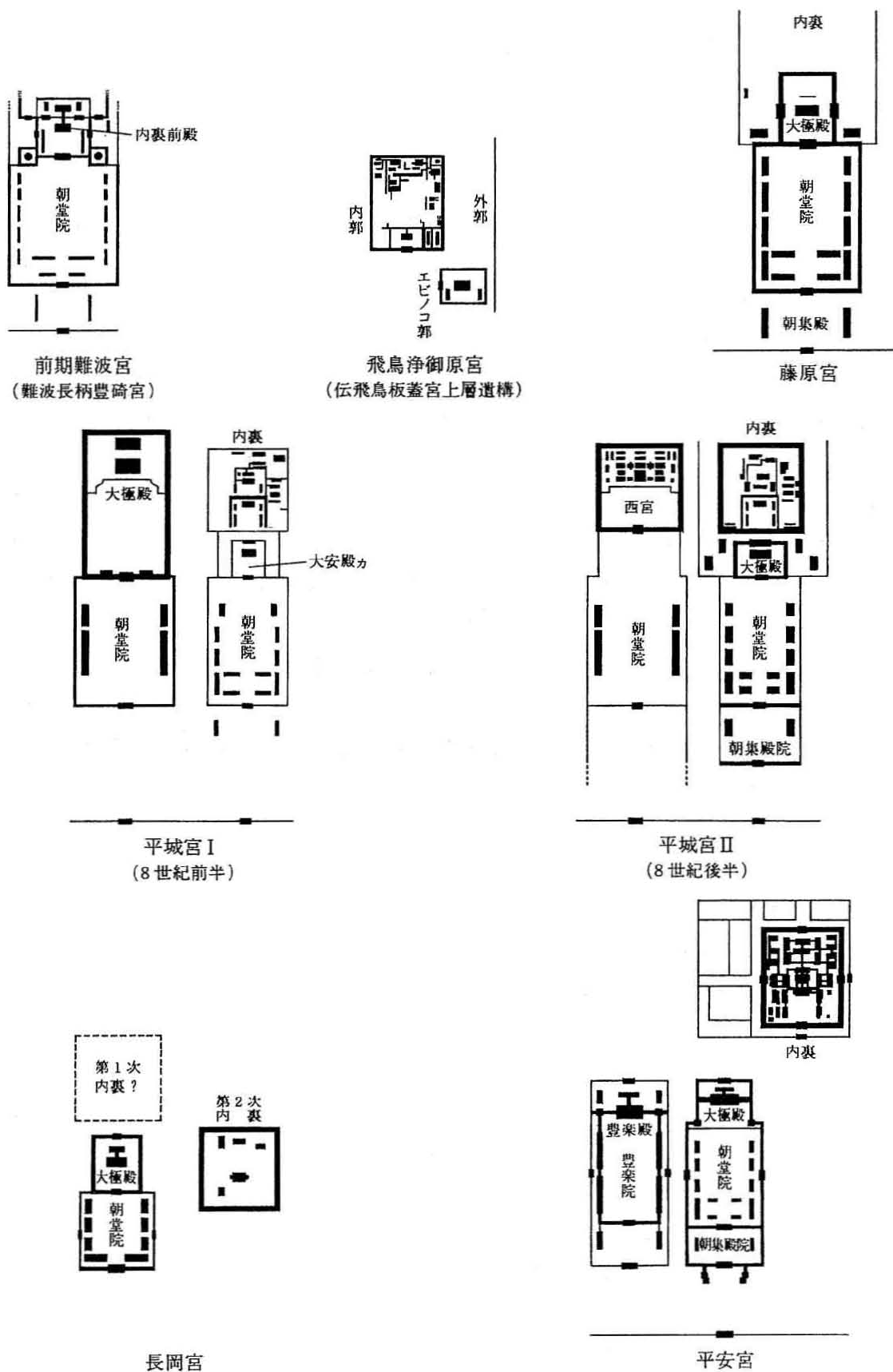


図7 朝堂院の変遷

移築された後も、その区画や周辺の建物が残っていた例を考えると〔注 35〕、あながち無理な想定ではないであろう。中枢建物が平城宮解体の最終段階、すなわち延暦十～十一年ごろまで、痛んではいたであろうが、解体されずに残っていた可能性は十分にあり得るのではないだろうか。

そして、この仮説がもし正しいのであれば、平城宮朝堂院の廃絶と、平安宮朝堂院の計画がほぼ重なることになる。つまり、平面プランにおいて連続的に展開する平城宮と平安宮の朝堂院は、時間的にも連続する可能性があると考えられるのである。

こうした、平城と平安が直接連続する可能性がある、という点で、先に述べた西大寺の状況は非常に注目されるであろう。西大寺食堂院が活動を停止する時期も、ちょうど平安遷都計画が具体化された前後である。

よく知られているように、南都の諸大寺は長岡京に移転していない。また、新たな寺院の建設も行われておらず、長岡は王権や王城を荘厳し、鎮護する寺院を持っていない〔注 36〕。一方平安京には、東寺・西寺が計画的に配置され、王権と王城を荘厳し、鎮護した。王権と王城を荘厳し鎮護する寺院の有無、という点でも、藤原—平城—平安の三都には連続的な展開が認められる一方、難波・長岡はこれと様相が異なる〔注 37〕。

東寺・西寺は新たに造営された寺院であり、南都寺院の法灯を直接ひくものではない。だが、官寺の僧侶であれば、分厚い教義の蓄積と戒壇を有する南都寺院と無関係ではあり得ないことはいうまでもない。また、東寺を預かった空海は、東大寺とも非常に関係が深かった。飛躍するが、東寺は東大寺の系譜を、西寺は西大寺の系譜を、わずかではあるがひくという意識が持たれていた可能性もあるのではないだろうか。藤原京から平城京に遷都した際には、大安寺・薬師寺・元興寺などの寺院が移転した。このとき、基本的には京内の同じ場所に、同じ伽藍配置で、建物型式も継承して造営された。一方、藤原旧京の寺院も、解体・廃絶することなく、法灯を伝えていたことが判明している〔注 38〕。こうした例から考えて、東寺・西寺と東大寺・西大寺が共存していても、問題はない。

以上見てきたように、朝堂の型式と寺院という、古代都城の二つの重要な点において、平城宮・京と平安宮・京には系譜的にも時間的にも直接的な連続性を見いだせる可能性がある。そして、それらの要素は長岡宮・京では別系統のものであったり、欠けていたりするものであった。一方で、平城と平安には大きな差異があり、長岡と平安に大きな連続性が見いだせる要素も多々ある。よく知られている重要な事例として、内裏と大極殿の関係と、条坊の計画方法がある。いずれも画期的な変化である。

だが、これらは時間的な経過に伴う都城の在り方の変化の一部と考えられる。たとえば、内裏と大極殿の関係についてみると、これは内裏外郭がその意義を低下させ、内裏内郭に後宮をはじめとする様々な機能が収斂していくという一連の過程の中で理解することができる。こうした変化は、藤原宮・前期平城宮・後期平城宮でも徐々に起きていると考えら

れる〔注 39〕。都城に通底する重要な要素が欠けている、という問題とは次元が異なる。さらに、朱雀大路を中心とし、正面性を重視した都城の景観という点でも、平城京・平安京には共通するが、長岡京は十分ではない可能性が高い。

長岡京は、古道を中心に展開する都城と、水系に展開する都城の二つからなる「複都制を止揚する都城」である、とされる。だが、上述の様にとらえられれば、都城史における長岡京の位置づけについて、少し検討し直しておく必要があるのではないだろうか。

2-3. 長岡京の位置づけ

翻って考えると、長岡遷都の前兆は難波でのがまの進行であった〔注 40〕。水陸の交通という点で、長岡はその優位性を謳われるが、ここで注目されるのは三国川の開削事業である〔注 41〕。堆積作用によって機能低下した難波津に代わり、直接淀川へ遡航できるようにする計画だったと考えられる。この計画は、律令国家の海の玄関としての機能をもつ、「難波津+難波宮」のセットを、まるまる「淀川+長岡宮」に遷そうとしている、と考えられる。建物の移動というだけでなく、都城の系譜・性格・機能などのあらゆる面で、長岡京は難波京との連続性がきわめて強い。この他にも、難波と長岡だけがあえて「皇都」と宣言されており、両者類似を暗示している様に感じられる。そしてすでに述べたように、平城京との連続性はそれに比べて希薄である。長岡京は、あくまでも「難波京の移転」と考えるべきではないだろうか。

また、長岡宮の後期造営では、平城宮からの建物を移築する。そこで、この後期の長岡造営こそ平城宮からの移転であり、ここに至って長岡宮に難波からの遷都と、平城からの遷都の二つの側面を見出し、「複都制を止揚した」と評価する見方もある。しかし、後期の造営においても中枢施設と寺院という二つの要素の不連続は克服されてはいない。やはり、難波宮・京の移転という段階から、大きく踏み出すことはなかった。そしてそうであれば、長岡京では「複都制の止揚」は成し遂げられていなかった、ということになる。

今まで述べてきた長岡京の特徴の多くは、すでに指摘されてきている〔注 42〕。天平年間の都城の在り方・変化が、こうした問題を考える上で参考になると思われる。

天平十二年に、聖武が関東に行幸、それ以降天平十七年の平城遷都まで、いくつもの都を転々とする。それ以前は、難波京と平城京のふたつの都であったが、この聖武の「彷徨」によって多くの都が造営された。律令官司機構や政権の中枢は、基本的には天皇とともに移動していたと考えられる。たとえば、平城宮・京での天平十三年～十六年の年紀をもつ木簡の出土は少ない。全国の紀年銘木簡のうち、天平十五年は 15 点中 5 点平城・9 点宮町遺跡（紫香楽宮）・1 点江平遺跡であり、天平十六年は 10 点中 1 点平城・8 点宮町遺跡（紫香楽宮）・1 点新宮神社遺跡（紫香楽宮隣接地）である。

一方、天皇が不在の都も、維持管理されていた。特に平城京では、貴族の邸宅が機能していた様相や、宮内でも一定の活動が維持されていた様相をしめす木簡が出土している。

故新田部親王の邸宅と考えられる、唐招提寺の下層以降から

〈 〉 菰三百丸 〈□〔駄カ〕二匹／天平十五年九月七日出雲真前〉

210,35,4 011 木研 8-119 頁- (12)

という木簡が出土した〔注 43〕。進上状に類する木簡と考えられ、日常的な物資の移動などに伴うものである。したがって、天平十五年当時、平城京内の故新田部親王邸〔注 44〕では、こうした日常的な活動が維持されていた。一方、平城宮の門の近辺でも

・○□〔司カ〕木 〈〉

・○天平十五年七月十八日付秦□□\勘建部□□〔人カ〕万呂○ □□〔尼美カ〕千□

267,41,4 011 形状 城 15-19 上 (96)

という木簡が出土しており、おそらくは宮内でなんらかの活動があったことと対応していると思われる。

複数の都がある場合、主要な官司等は天皇の居所に密着して移動し、一方で旧来の都の活動も維持されていた。特に貴族が本拠地とする邸宅の場合その傾向が顕著に見られるといえるであろう。遷都や天皇の移動は、そのままそれ以前の都の廃止ではなかった。また、天平六年には難波京で宅地班給が行われている〔注 45〕。また、時期も様子も異なるが、保良京での宅地班給の記事もある〔注 46〕。複都制の場合、それぞれの都城での宅地班給もあり得るのである。

そのほか、軍隊の活動や遷都前後の治安悪化などは、いずれの場合も見られることである。天平年間の遷都の様相と、長岡遷都と大きな違いは確認できない。そしてむしろ、長岡から平安への遷都の方が特徴的で、遷都後すぐに京内の土地を田地として賜与している〔注 47〕。長岡京の「廃都」を明瞭に示す行動であろう。同様の例は他に見あたらないが、藤原京が遷都後早くに田地化している事例が参考になるかもしれない。

このように、長岡遷都は、天平年間の遷都、すなわち複都制下の遷都と同列にとらえることができる。つまり、「複都制を止揚した」とは言い切れないと思われるのである。極端にいうと、天平年間の新都と同じように、新たに造営された都とみることも可能であろう。ただし、先にも述べたように、長岡京は難波京との連続性や難波京の解体との関連性が非常に強い。やはり、長岡京は平城京の移転ではなく（平城京からの遷都ではある）、複都制下の都城の一つである、難波京の移転であったと考えるのが妥当であろう。

このように考えると、長岡京で大伽藍が計画も、建設もされた形跡がないことも非常に素直に理解できるであろう。長岡京に南都の寺院が移転しなかったのは、桓武天皇が仏教勢力を嫌ったためという説明がしばしばなされる。だが、桓武天皇も様々な仏事を催しており、その際には南都の僧侶が重要な役割を果たしている。また、平安京では東寺・西寺

という王権と王都を荘厳し鎮護する寺院を置いた。必ずしも桓武天皇が仏教を嫌ったということではないと思われる。やはり、長岡京が難波京の移転であったことによる、理解することが、最も自然でわかりやすいと思う〔注 48〕。

長岡宮へ、難波宮から建物を移築したのは遷都を急ぐためと考え〔注 49〕、一方平城宮に建物が残ったのは抵抗勢力への懐柔策と考えるという見方があるが〔注 50〕、これは先に述べた「桓武の意図」ありき、の見解のように感じられる。時間的に急ぐためであれば、恭仁宮や平安宮の例から考えてもわかるように、難波宮からの移築を選択する必然性はない。やはり、難波宮の解体もしくは移転という側面を重視せざるを得ない。また、懐柔策として平城宮が残されたのだとして、それが効果があったならばなおさら当時の人々にとって長岡宮は複数ある都の一つ（王権の所在する首都ではあったはずであるが）だったと考えるべきである。

以上、平城京と平安京が都城としての形態・特徴に連続性があることを再確認し、西大寺食堂院の調査成果、平城宮東朝集堂に関する近年の研究などを用い、両者の連続性が時間的にも認められる可能性を指摘し、長岡京が難波京からの移転であり、複都制を止揚する都ではなかったことを論じた。実は、複都制止揚の議論を展開した岸俊男氏も、水系の都を難波・長岡とし、古道の都を藤原・平城として、こうした複都制を平安京が止揚した、と述べている文章もあるのである〔注 51〕。

だが、それでも長岡京には大きな魅力が秘められている。平城宮に桓武天皇が帰ってくることは、事実無かった。平安遷都につながる、山背遷都の第一歩であった。都市機能の点でも、長岡京の京域は、難波京の京域より格段に整備が進んでいる様に思われる。王権の中樞は長岡宮に移動していたし、それを支える律令官司機構も長岡京に移っていた。一方、平城宮は、極めて計画的に解体されている様に見受けられる。長岡宮・京には、内裏と大極殿の分離や京内の街区割付の変化など、都城史の上でも非常に画期的で重要な変化が認められる。さらに、桓武の新王朝意識など、政治史の見解や、歴史学的課題と直結するダイナミックさを、長岡京は持っている。

そこで、上述のように長岡京をとらえたとき、どのような歴史像を描くことができるか、検討してみたい。

3. 平城京のさいご

3-1. 難波の位置づけ

さて、長岡京が難波京の系譜を引く都城である可能性が高まった結果、改めて注目すべき点がある。それは、難波京の位置づけである。

実は、難波の地は奈良よりはるかに都の地としての伝統を誇る土地である。孝徳朝の難波長柄宮以来、ほぼ同じ場所で繰り返し替えて整備されてきた。同時代のあらゆる都城より、

古くからの伝統を誇る。いうまでもなく、瀬戸内海からの畿内の玄関口であり、流通・外交上も重要な場所であり、施設群であった〔注 52〕。

また、天武天皇やその孫の文武天皇にとって、非常に重要な都であった〔注 53〕。そしてとりわけ、聖武天皇は難波への愛着が深かったという指摘がある。聖武は、非常に積極的に難波京を整備した。聖武天皇にとって、平城宮はあまり居心地の良い都ではなかった様である。聖武にとって平城は与えられた都であり、難波は自ら整えた都であった。

さらに、聖武にとっての難波の地は、単に愛着が深い、という程度のものではなく、その生命力を増幅させる土地であった、という指摘がある。そして、そうした難波のとらえ方の背景には、後の八十島祭りにつながる祭祀が行われていたことがある、とも指摘されている〔注 54〕。王権にとって、精神的にも重要な場所であった。

また、律令官人の出身地としても、大和と摂津・河内が圧倒的な比率を占める。大和と並んで難波は王権の本拠地であったといつてよい。東の伊勢と並ぶ西の海への玄関口であり、生命力を再生する地であり、かつ王権の本拠地の一角を形成していた。

このような古くからの伝統があり、精神的な意味も大きく、かつ古代日本最大の港湾である難波津を擁する難波京を移転することは、決して小さな出来事ではなかったはずである。聖武天皇時代も平城京から天皇が移動することも、それにとまって律令官司機構が移動することも、さらに建物を移築することもあった。8世紀に天皇が、大和以外の地に宮殿を造営することもあった〔注 55〕。「京」と称する施設を整備しようとしたこともあった〔注 56〕。しかし、難波宮の建物を移築したり、難波京を解体・移転することは初めての出来事である。平城京から長岡京へ天皇が移り、官司が移動することよりも、遙かに抵抗感も強かった可能性もあるのではないのだろうか。難波の移転は決して小さな出来事ではなく、非常に大きな事件であった。だからこそ、ガマの大神のような前兆をとりたててフレームアップしたり、遷都への入念な準備が必要とされた。これまで、長岡遷都を考える際に、難波京をあまりに過小評価していたのではないかと感じられるのである。

そして難波宮をめぐっては、もう一つ重要な点がある。8世紀の難波宮は、百済王氏との関係が非常に深いと考えられているのである〔注 57〕。

長岡京の南、郊天祭祀が行われた地域が、百済王氏が盤踞する地域であったことはつとにしられている。長岡京を支える勢力の一つが、百済王氏であったことは確実であろう。そしてこれもまたよく知られているように、桓武天皇の母は百済王氏の一族であった。難波から長岡への遷都は、こうした百済王氏のパイプを使つての遷都と評価することもできる〔注 58〕。

さらに踏み込むと、次のような想定も出来るのではないだろうか。難波京の解体・移転という、強い抵抗も予想される事業を円滑に実現するためには、強力な援助が必要であった。その協力者こそ桓武にとって重要な血縁者であり、難波ともゆかりの深い百済王氏で

あった。この様に考えると、長岡京の場所に大きな必然性を見いだすことが可能になると思う。百済王氏に近い場所、という内容が都の場所の条件の一つであったと推測する。

では、なぜ難波京を移転させる必要があったのであろうか。

難波津は機能を低下させてきており、瀬戸内海の玄関として機能させるためには、何らかの打開策が求められていた。一方、外交関係では、渤海の重要性がましていた。その渤海からの使者に対し、大宰府に来るよう求めてはいたが、実際には日本海側、とくに北陸道諸国に着くことが多く、渤海への遣使も北陸道から行われていた〔注 59〕。外交の拠点としての意義も、相対的に低下傾向にあったと考えられよう。難波京の必然を支えていたいくつかの要素が、失われつつあった。

ただし、注意すべきことは、難波宮の地は後に石山本願寺や大坂城が築かれた場所である。石山合戦の例をみてもわかるように、瀬戸内海水運との直接的な結びつきは維持されていたわけである。交通の要衝であり、経済的にも軍事的にも要地であるという、位置的・地形的に優れた特性は変化していない。桓武朝に難波京の必然性が低下していたとしても、どうしても移転しなければならないという状況ではなかったと考えられる。

そこで、「天武系」「天智系」という視点で捉えるならば、「天武系の都城」と考えられがちな平城京より、難波京のほうが「天武色」が濃かったであろう。もし、桓武天皇が天智系を強く意識していたならば、難波京はどうしても否定すべき都であったに違いない。

さらに深読みすれば、動かしにくい難波京の移転をてこに、権力の強化・集中をはかったものであるかもしれない。最終的に平城宮も解体して、いくつも点在して混乱した都を統一した、自らの壮麗な都を建設するという大目標が、密やかに用意されていたとしても不思議ではないであろう。

長岡遷都は、それまで倭王権がその玄関口として重視してきた、そして天武系につらなる聖武天皇たちが大事にしてきた難波を廃止し、移転させるという一大プロジェクトであった。その背景には、難波の港湾機能の低下、外交の渤海重視へのシフトといった状況があり、また百済王氏の全面的なバックアップによって成し遂げられたものとする。

3-2. 平城京の最後と延暦十年

では、平城の解体はどのように考えられるのであろうか。すでに述べたように、平城宮は延暦十年まで圍繞施設を維持しており、翌延暦十一年に至っても軍隊を派遣して警備すべき物資や施設が残っていた。すでに論じたように、長岡遷都は、平城京から難波京への遷都と、難波京への長岡京への移転という二つの事態を同時に進行させたものと考えられ、複都制下の遷都と同様に理解できる。長岡遷都を以て、平城宮が解体されたわけではない。

平城京の変化で注目されるのは、延暦八年の造東大寺司廃止である〔注 60〕。東大寺は造東大寺司の廃止によって、造営活動を縮小せざるを得なくなったであろう。『東大寺要録』に収められた「実忠二十九箇条」は、東大寺僧実忠が自らの活躍を書き上げたもので

ある。彼は、特に造営関係で大きな活躍をしているが、東大寺での造営活動は造東大寺司廃止以降に限られる。実忠の活躍は、造東大寺司廃止によって、造営・修理活動を寺家みずからの手で行わなければならない状況において、必要とされた。造東大寺司の廃止は、東大寺にとっては重大な出来事であった〔注 61〕。内裏の解体・移築もこのころと考えられており、難波京の解体が一段落して、いよいよ平城京に目が向き始めたのであろう。

だが、やはり本格的に解体された時点を求めるならば、延暦十年ごろと考えざるを得ない。この点はこれまでの述べてきた通りである。特に、政治的には延暦十年の諸門の解体は大きな意義がある。宮城の圍繞施設を解体するという、視覚的にも明確な解体が行われた。そして、延暦十一年の記事では「平城旧宮」という表現になるのである〔注 62〕。ちなみに、長岡宮は遷都直後の延暦十四年に、すでに「長岡旧宮」と称されている〔注 63〕。『日本紀略』の記事であり、問題もあるが、こうした違いは興味深いと思う。

以上のような状況から、延暦十年の諸門の解体こそ、平城廃都の瞬間と考える。清水みき氏は延暦十年の平城宮諸門の移転を「平城宮の政治的終焉」あるいは「平城京廃都の完了」と捉える〔注 64〕。古代都城の基本的な属性が「政治都市」である以上、政治的終焉こそ都城の終焉である。「廃都の完了」という表現には若干問題があるように思うが、いずれにせよこの平城京諸門の解体こそ平城廃都ととらえるという点では、私見と一致する。

そして、延暦十年が平城廃都であれば、ここに長岡京による「複都制の止揚」が達成できた、と考えたくなる。だが、既に述べたように廃都となった平城京にはその次の都である平安京との連続性が強い。また、平城廃都とほぼ同時期に平安遷都の構想が用意されていた可能性が高い。

こうした状況から考えると、長岡京では、「複都制の止揚」が出来ないことが、明白だったのではないだろうか。いかに本格的に工事をしようと、難波宮の移転である長岡宮は、それを越えることができなかった。都市機能は確かに充実しはじめていたものの、難波同様の港湾機能との密着や、百濟王氏との関係など、様々な制約から選ばれたその地形は、本格的な都城を展開するのに、必ずしも適していなかった。

複都制、あるいは「都」が複数存在する形態を克服し、一箇所に収斂するためには、難波京の解体・長岡遷都を経て、集中することに成功した権力を以て、新天地に自らの都を作ることが必要だったのではないか。それこそ、平安京であった。平安京は、藤原一平城と展開してきた都城の系譜と、平城一長岡と展開した諸相をどちらもよく取り込んだ、都城の完成形態である。平安遷都が完了した延暦十四年に至って「山背」が「山城」に改名されたことも〔注 65〕、納得しやすいのではないかと思う。仮に、以上の仮説が成り立つならば、延暦十年という年は都城史の上で非常に重要な画期となる。

桓武朝の二大事業は、「造都と征夷」である。造都において延暦十年およびその前後が大きな画期であるように、征夷においても一つの変化を見いだすことができる。光仁朝に

激化した蝦夷との衝突において、延暦八年にはついに大敗を喫してしまう〔注 66〕。その後、体制の立て直しが図られ、延暦十年大將軍が任命され〔注 67〕、延暦十三年には大勝利を収めることに成功し〔注 68〕、以後律令国家側が優位となる。軍事行動としては延暦十三年の勝利によって、不利な流れを転換することに成功したのである。移民の入植など、延暦十四年以降等を重視する見解も有力であるが〔注 69〕、これらは延暦十三年の大勝利があってはじめて可能になった。延暦十三年の勝利こそ、その後の蝦夷戦争・政策を決定づけるものと考えられよう。

延暦十三年の勝利を可能にした要因の一つに、旧来の伝統的な人事・軍事体系をやめて、新機軸を採用したという、人事や体制の変革がある。坂東豪族を排して、現地有力者の登用する一方、副將軍に坂上田村麻呂の登用したのである〔注 70〕。大將軍以下の任命に明らかかなように、この体制は延暦十年に用意されたものであった。

造都でも征夷でも、旧来の体制との決別・新体制の確立が、延暦十年に行われ、十三年にかたや平安遷都として、かたや大勝利として具体化したのである。延暦十年の画期性は極めて高いと言わざるを得ない。

4. おわりに

興味深いことに、こうした出来事を伝える歴史書・『続日本紀』は延暦十年でおわり、『日本後紀』は延暦十一年から新たにはじまる。『続日本紀』は、六国史中、天皇の代替わりで終わらない唯一の例である〔注 71〕。そして、自分の治世を自ら国史に編纂した唯一の例でもある。『続日本紀』の終わり方は、「異常」である。

これについては、『続日本紀』の編纂開始が延暦十年だったことによる、とする見解が有力である。だが、理由はそれだけなのか、さらにはなぜ延暦十年に編纂を開始したのだろうか。光仁天皇に始まる新王朝を意識するなら、光仁天皇から『日本後紀』を始めても良い。わざわざ自らの治世を自ら編纂したほどなのであるから、平安遷都までを含ませることも、逆に長岡遷都で擱筆することも、可能であったはずである。

『続日本紀』の終わりが、延暦十年の画期性と対応する可能性はないのだろうか。延暦十年までは、長岡遷都にせよ、平城廃都にせよ、蝦夷戦争にせよ、いわば「過去の清算」であった。この「過去の清算」を終え、いよいよ自分の手で都を造営し、蝦夷戦争の体制も作ったのが、これ以降の桓武の歴史である。平安遷都でも、対蝦夷戦争の勝利でもなく、延暦十年を桓武がわざわざ選んだ背景には、延暦十年以前は自分が過去と格闘した時代であり、奈良時代の延長であったのに対し、延暦十一年以降は自分が切り開いていく「新しい時代」である、と考えていたからではないか、先程封印した「桓武の意図」という言葉を、ここで開封したいと思う。

注

- [1] たとえば第一次大極殿の成立時期をめぐる議論や、いわゆる「十条問題」をあげることができる。
- [2] たとえば『国立歴史民俗博物館研究論集 第134集 [共同研究] 律令国家転換期の王権と都市（論考編）』（国立歴史民俗博物館、2007年）にはこうした問題をめぐる議論が収録されている。
- [3] 『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査概報』（奈良文化財研究所、2007年）
- [4] 『西大寺資財流記帳』は宝亀十一年の年紀を持つ。鎌倉時代の写本が伝わる。ただし、現存するのは一部分のみ。
- [5] 『続日本紀』宝亀元年二月丙辰条。
- [6] 『日本霊異記』下巻第三十六縁。
- [7] 浅野清・大岡実「西大寺東西両塔」（『日本建築学会論文報告集』54、1966年）ほか。
- [8] 「西大寺薬師金堂の調査」（『奈良文化財研究所紀要2007』奈良文化財研究所、2007年）
- [9] 以下の食堂院に関する宗教的理解の多くは、種智院大学の佐伯俊源氏のご教示によるところが大きい。
- [10] 興福寺食堂は発掘調査がされているが、実務空間までは調査されていない。西寺食堂院も発掘調査があるが、実務空間の全貌はまだ明らかでない。
- [11] 一部、僧坊とのとりつき部分などの調査がある。
- [12] 『西隆寺発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報第52冊、1993年）。
- [13] 西大寺の古絵図は、中世以降のものであるが、平城京図などに基づいて作成された可能性が高いと考えられている。『西大寺古絵図は語る』（奈良国立博物館、2002年）など参照。
- [14] 前掲〔注3〕書。以下、当該調査の内容は同書による。なお、出土木簡については『平城宮発掘調査出土木簡概報』38（奈良文化財研究所、2007年）も参照。
- [15] 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成9年度』（奈良市教育委員会、2000年）
- [16] 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成15年度』（奈良市教育委員会、2006年）
- [17] 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』（奈良市教育委員会、1994年）
- [18] 他の建物については、かなりの蓋然性がある。しかし、この甲双倉は、資財帳には「瓦葺」とあるが、検出遺構は掘立柱で、残存していた注根もそれほど太くはない。ただし、敷地の状況等から他にあてべき建物がないことなどから推定している。
- [19] 佐伯俊源氏のご教示による。

- [20] 文書木簡は通常利用してすぐに廃棄されると考えられている。横田拓実「文書様木簡の諸問題」(『研究論集』Ⅳ、奈良国立文化財研究所学報第 32 冊、1978 年)など。
- [21] 前掲〔注 3〕書。なお、同書での木簡に関する記述は渡辺晃宏氏。
- [22] 『日本紀略』延暦十二年正月甲午条。
- [23] 山中章『長岡京研究序説』(塙書房、2001 年)、清水みき「長岡京造営論」(『ヒストリア』110、1986 年)、同「桓武朝における遷都の論理」(門脇禎二編『日本古代国家の展開』思文閣出版、1995 年)、国下多美樹「長岡京」(吉村武彦・山路直充編『都城—古代日本のシンボリズム』青木書店、2007 年)など。
- [24] 瀧浪貞子「京戸の存在形態」(『古代文化』46-3、1994 年)、館野和己「平城京その後」(門脇禎二編『日本古代国家の展開』思文閣出版、1995 年)、同「平城宮その後」(大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質』思文閣出版、1997 年)、同「廃絶後の都城」(『古代都市の構造と展開』奈良国立文化財研究所、1998 年)。
- [25] 前掲〔注 23〕の諸論文。
- [26] 館野氏前掲〔注 24〕論文(「平城京その後」)。
- [27] 第 259 次調査で出土した木簡。『平城宮発掘調査出土木簡概報』32(奈良国立文化財研究所、1996 年) p.13。なお、この第 259 次調査で出土した木簡は、長岡遷都時にまとめて廃棄された可能性が考えられている。
- [28] 一般的な官衙というより、内裏の移動に伴ってこれらの木簡・文書が移動した可能性も残る。
- [29] 『続日本紀』延暦十年四月戊申条。
- [30] 『続日本紀』延暦九年九月丙寅条。この「京下七ヶ寺」は、長岡京域に遷都以前から存在した寺院を利用したとする見解が有力であろう。しかし、長岡京域に七ヶ寺の有力寺院は確認できていない。後述するように平城京が未だ廃都になっていなかった可能性をふまえると、平城京の七大寺という可能性も残ると思われる。
- [31] 『日本紀略』延暦十二年十二月壬戌条。
- [32] 網伸也「平安京」(吉村武彦・山路直充編『都城—古代日本のシンボリズム』青木書店、2007 年)
- [33] これらの問題については、『古代都市の構造と展開』(奈良国立文化財研究所、1998 年)での討論要旨の中で端的に議論されている。少なくとも、空間としてとらえたときに両者には差があることは確実であろう。
- [34] 山崎信二「創建の時期について」(奈良文化財研究所編『奈良の寺』岩波書店、2003 年)

- [35] 第一次大極殿地区のⅠ－4期と称される時期にあたる。
- [36] 長岡京域にもともとあった寺院は強化されてる可能性を考えることもできるかもしれない。しかし、平城京や平安京で本格的に造営された大寺院とは、根本的に規模・質が隔絶することは言うまでもない。
- [37] 難波宮周辺に寺院が展開していた可能性が指摘されている（後掲〔注 57〕論文など）。また、四天王寺の存在も重要であろう。ただし、これらの寺院は都城制成立以前からの寺院としての性格が濃厚であろう。
- [38] 伽藍や建物の類似は、大岡実『南都七大寺の研究』（中央公論美術出版、1966年）などに指摘がある。
- [39] 藤原宮や平城宮は、内裏外郭に囲繞された「天皇のミヤ」にマエツキミの伺候空間である太政官院（太政官院の性格は、吉川真司「王宮と官人社会」（『列島の古代史 3 社会集団と政治組織』岩波書店、2005年）による）が付随し、さらにその周辺に展開する外廷系官司等が「大垣」で囲まれる、という空間構造と理解することができる。平城宮の場合、宮内には、「天皇のミヤ」以外にほぼ同規模の「皇太子のミヤ」（＝東院）など複数のミヤが包摂されていた。藤原宮と平城宮の違いのひとつに、「皇太子のミヤ」が宮内に包摂されるようになった、という点あげられよう。つまり、各所に分散していた「ミヤ」が宮内という閉鎖的空間の中に取り込まれていくのであり、かつ取り込まれなかった「ミヤ」は王権から阻害されるか、離宮という位置づけになる。一方、内裏内郭の変化について、奈良時代を通じて後宮が充実していく（橋本義則『平安宮成立史の研究』塙書房、1995年）。すなわち「皇后のミヤ」は宮内に包摂されるにとどまらず、内裏内郭に取り込まれていったのである。分散していたミヤが内裏に収斂していく空間的変化は、分散的な権力形態から王権中枢部に権力が集中していく過程を示しているようにさえ感じられる。そして、内裏の変化が明らかにしたように、こうした変化は奈良時代中にはすでに起こっていた。平城宮の場合、宮内の中枢区画の大規模な変更を行う空間的・時間的余地を有していなかったため、こうした変化に対応した改作はないが、次に都城が作られる際にはこうした変化が反映されたものになるであろうことは推測に難くない。そのあらわれが、後期長岡宮における内裏と大極殿の関係であろうと考える。
- [40] 『続日本紀』延暦三年五月癸未条。
- [41] 『続日本紀』延暦四年正月辛亥条。
- [42] たとえば、金子裕之「朝堂院の変遷をめぐる諸問題」（奈良国立文化財研究所編『古代都城の儀礼空間と構造』奈良国立文化財研究所、1996年）など。
- [43] 釈文は『木簡研究』18（1996年）によった。

- [44] 新田部親王の邸宅は、おそらく塩焼王ら子供に伝領されていたであろう。
- [45] 『続日本紀』天平六年九月辛未条。
- [46] 『続日本紀』天平宝字五年正月丁未条。
- [47] 『類聚三代格』卷十五諸司田事所収延暦十四年正月二十九日太政官符。なお、この官符の中では「旧京」とは言われていない。また、『日本紀略』延暦十六年八月戊寅条でも「長岡京」としている。一方同じ『日本紀略』でも、延暦十三年五月庚辰条にはすでに「長岡旧宮」とある。「宮」と「京」での差異も想定する必要があるかもしれない。
- [48] 長岡京を「副都」と位置づける見解があり、またそれに対するように長岡京を「正都」と位置づける見解もある。「正都」か「副都」かを論じるためには、それぞれの語義や「複都制」全体をどのように考えるか、あるいは「遷都」とは何か、といった点を整理する必要がある。これまでの議論ではこうした問題点の整理が必ずしも十分ではないように思う。現在の筆者にも十分な用意はなく、「正都」「副都」といった観点から論じきる力量がない。ただし、もし、難波京が「副都」であれば、その移転である長岡京も「副都」であると考えられよう。「正都」と「副都」の間で瓦が動いた事例がなく、「正都」たる平城宮の瓦が運び込まれているのであるから、長岡京は正都である、とする見解がある。だが、難波宮・京は長岡に移転するまで維持され続けたのであり、移動の機会が無かった。平城宮内で難波宮式の瓦が見つかることもあり、瓦が「正都」か「副都」の間でしか移動しないから、平城の瓦が移動している長岡は「正都」である、とするのは根拠として不十分であろう。長岡京正都論の立場の研究者も、難波京を「副都」と認定しているように思われる。難波京を「副都」としながら、長岡京を「正都」とするのはあまりにも唐突である。この唐突さを補うためにしばしば「桓武的意図」というフレーズが用いられる。桓武天皇が日本史上極めて強い個性と影響力の持ち主であったという点に異存はない。だが、先にも述べたように直ちに説明しがたい歴史的事象を、「桓武の意図」という言葉で切り捨てるのはいかがなものであろうか。事実関係を詰めた上で、整理して考えるべきものではないのであろうか。ただし、長岡遷都後の王権の所在地は長岡京であり、律令官司機構も長岡京に移転していたと考えられる。もし「首都」を考えるのであればいうまでもなく長岡京になると考える。首都と正都は同値ではないであろう。
- [49] 山中氏前掲〔注 23〕書、清水氏前掲〔注 23〕論文など。
- [50] 館野氏前掲〔注 24〕論文（「平城京その後」）
- [51] 岸氏は「以上が飛鳥、藤原、平城、あるいは恭仁と進んだ複都制の首都、つまり主流宮都の古道による展開であるとすれば、これと別に副都の展開がある。それ

- は、難波京から長岡京へと淀川の水系を遡る傍系宮都の展開である。そしてこの二つの古道と水系による宮都の展開を止揚したものが、実は平安京であったと私は考えたい」と述べている（岸俊男『日本の古代宮都』岩波書店、1993年、p.110）。
- [52] 難波地域が流通の要地であったことはいうまでもない。特に「摂津職」がおかれた「宮」との関係では、外交関連の機能と交通の勘検機能もが注目される。
- [53] 山本幸男「聖武朝の難波宮再興」（『続日本紀研究』259、1988年）。
- [54] 栄原永遠男「行幸から見た後期難波宮の性格」（栄原永遠男・仁木宏編『難波宮から大坂へ』和泉書院、2006年）。
- [55] 紫香楽宮などがその例としてあげられる。
- [56] 保良京など。
- [57] 古市晃「難波地域の開発と難波宮・難波京」（吉村武彦・山路直充編『都城—古代日本のシンボリズム』青木書店、2007年）など。
- [58] この視点は、清水みき氏の口頭でのご教示によるところが大きい。
- [59] 宝亀年間に、渤海使に対して大宰府を経由するよう命じる。にもかかわらず、延暦末年には能登客館が整備されるなど、大宰府からシフトしている。渤海使が北陸地域に来続けた実態に引きずられた結果と考えられ、大宰府—難波の機能が縮小した現象の一つとも考えられると思う。
- [60] 『続日本紀』延暦八年三月戊午条。
- [61] 近年の奈良市による発掘調査で、大安寺の東塔は平安時代に建てられたことが明らかになった。注目すべき事例であるが、東大寺が造営活動を縮小し、西大寺が活動そのものを縮小した後、大安寺では大規模な造営が行われている点も興味深い。先程、東寺・西寺と東大寺・西大寺になんらかのつながりがあるのではないかと述べたが、平安京につながりがない大安寺の場合、南都での大々的な造営が維持されていたらしいことはこの推測を若干補強するよう感じられる。
- [62] 『日本紀略』延暦十一年二月癸丑条。
- [63] 『日本紀略』延暦十三年五月庚辰条。なお、〔注 47〕でふれたように、「京」の場合後々まで「旧」字を付けていない。
- [64] 清水氏前掲〔注 23〕論文
- [65] 『日本紀略』延暦十三年十一月丁丑条。
- [66] 『続日本紀』延暦八年九月戊午条など。
- [67] 『続日本紀』延暦十年七月壬申条。
- [68] 『日本紀略』延暦十三年六月甲寅条、同十月丁卯条など。
- [69] 鈴木拓也『古代東北の支配構造』（吉川弘文館、1998年）
- [70] 樋口知志「延暦八年の征夷」（蝦夷研究会編『古代蝦夷と律令国家』古志書院、2004

年) など。

- [71] 坂本太郎「六国史」(『坂本太郎著作集3 六国史』吉川弘文館、1989年)。なお、以下『続日本紀』編纂過程等は、笹山晴生「続日本紀と古代の史書」(『新日本古典文学大系 続日本紀1』岩波書店、1989年)による。

図出典

図1 前掲〔注3〕書、p.49、図45

*原図出典 左：宮本長次郎ほか編『平城京復元模型記録』(奈良市、1978年)

右：宮本長二郎「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」(『西大寺と奈良の古寺』日本古寺美術全集6、集英社、1983年)より一部改変

図2 前掲〔注3〕書、p.6、図4

図3 前掲〔注3〕書、p.8、図7

図4 前掲〔注3〕書、p.50、図46

図5 前掲〔注3〕書、p.12、図15

図6 『岩波日本史辞典』(岩波書店、1999年) p.1397

図7 『岩波日本史辞典』(岩波書店、1999年) p.1399